声

野元 広

「遠いからご連絡しませんでしたが、母がなくなりました」

東京にいる従妹から電話があった。満中陰が過ぎたので、お知らせします、と。葬式は近頃流行の家族葬で済ませたという。

その電話を聞いているうちに、不思議な気分になった。少し粘り気のある声の調子、女にしては低音で、ゆったりとした間の取り方など、電話の向こうで話しているのは、亡くなった伯母のような感じがしてきたのだ。伯母が自分の死を伝えてきたみたいに思える。彼女は脳梗塞で倒れて十年間、ベッドで眠り続けてきた。その間、伯母のイメージが壊れるといって会わせてくれなかった従妹だけれど、その苦労には頭が下がる。時折、声に少しさばさばした思いが混じる。そのときだけ現実が甦る。あとは伯母の声として聞きたいと思った。

思い浮かぶのは、私が少年の頃の声と面影。「いつでもいらしゃい」とその声はやさしかった。それに瓜実型の顔、ひっつめに結い上げた額の優美な曲線、愁いを湛えた眉、一重だが、形のいい目などは、この間TV放送で見た黒田清輝の『湖畔』の絵を思い起こさせる。

私が大学に入った夏、避暑を兼ねて尾瀬ヶ原に近い伯母の家に行った。母の兄である叔父は尾瀬の周りの森を護る仕事が忙しく、このところずっと山に入ったままだという。従妹は東京の大学のゼミの行事でまだ帰省していなかった。山村の小さな家で私と伯母はふたりきりの夜を迎えた。

「夜は動物の声が聞こえて、怖いから同じ部屋で寝てね」

そう言った伯母の声が今も心の底に残っている。声は勝手にどんどん心のなかに染み込んできて膨らんだ。とても喉が渇いていた。寝間着の緋色地の伊達帯に刺繍された金糸が誘うようにあやしく輝いている。

布団は微妙な間隔で敷かれていた。手を伸ばせば届きそうだ。憧れの伯母と同室で眠るなんて……、私の心は乱れ、眠ろうと思えば思うほど目が冴え、不謹慎だが、伯母の裸身まで目に浮かぶ。

やがて、伯母の寝息が聞こえ始めた。私は暗闇に目を凝らした。最初は何も見えなかった。次第に慣れて眠る伯母の横顔がうっすらと見えるようになった。闇がすべてを洗練させ、そばに寄って頬ずりしたくなるほど美しい寝顔だった。手を伸ばそうとした。でも、どうしたことか動かなかった。懸命に力を入れるが、どうしようもない。

金縛りにあったような辛い夜が明けた。

伯母はすでに寝床にいなかった。

台所へ行くと、

「よく眠れた？」

伯母は振り返って微笑み、低いが艶のある声で聞いた。心のなかまでお見通しかもしれないと、私は下を向いたまま肯いた。

晴れているのに、うすい霞がかかったような午後、従妹に案内されて伯母の墓に詣でた。

従妹はしばらく会わないうちに声も顔も仕草も伯母そっくりになっていた。

冥福の思いを込めて墓石にかけた水が黒御影の濃さを増して流れた。強い憧れ故か、夢の中だったのか、あのときの思いがゆっくりと甦った。

「お参りに来てくれて嬉しいわ」

伯母と従妹の声が重なって背後から聞こえたような気がした。